

第Ⅷ章 Rimac川防災対策実施計画

	目次	頁
1.	概要	VIII-1
2.	実施計画代替案	VIII-1
	2.1 土石流・斜面崩壊対策	VIII-1
	2.2 洪水災害対策	VIII-1
3.	実施計画の選定	VIII-2

附表

VIII-3-1	土石流・斜面崩壊対策計画・投資計画(ケース1)
VIII-3-2	土石流・斜面对策計画によるプロジェクト便益(ケース1)
VIII-3-3	土石流・斜面崩壊対策計画・投資計画(ケース2)
VIII-3-4	土石流・斜面对策計画によるプロジェクト便益(ケース2)
VIII-3-5	洪水災害対策計画・投資計画及びプロジェクト便益(ケース1)
VIII-3-6	洪水災害対策計画・投資計画及びプロジェクト便益(ケース2)
VIII-3-7	洪水災害対策計画・投資計画及びプロジェクト便益(ケース3)

附図

VIII-2-1	土石流・斜面崩壊対策実施計画(ケース1)
VIII-2-2	土石流・斜面崩壊対策実施計画(ケース2)
VIII-2-3	洪水災害対策実施計画(ケース1)
VIII-2-4	洪水災害対策実施計画(ケース2)
VIII-2-5	洪水災害対策実施計画(ケース3)

第Ⅷ章 Rimac川防災対策実施計画

1. 概要

策定された防災対策計画に対する実施計画の検討を行った。検討に際しては、代替案を設定し、これらに対する比較検討を通して最適案を選定した。

検討結果によれば、本防災対策計画は可能な限り早期に実施されるべきであるという事が判明した。検討結果の詳細は次節以下に述べられる。

2. 実施計画代替案

2.1 土石流・斜面崩壊対策

次の事項を勘案し代替案の設定を行った。

- (i) 高い危険度及び緊急性を有する地区に対する施設計画を優先的に実施する。
- (ii) 安全度をある対象地域一様に高める様実施する。具体的には、各溪流地区1つずつ順次実施していくという事ではなく、いくつかの溪流を1つにまとめブロックとし、このブロックごとに施設計画を実施する。

上記に基づき策定された実施計画代替案を図Ⅷ-2-1(ケース1)及びⅧ-2-2(ケース2)に示す。

上記ケース1は一般的な実施計画であり、ケース2は財政的制約等からその実施が遅れる場合の実施計画となっている。

2.2 洪水災害対策

次の事項を勘案し代替案の設定を行った。

- (i) 上流域より実施した場合には下流域において洪水流量の増加を招く恐れがあるため、原則として河川改修は下流域より開始し、順次上流域に向かって実施するものとする。
- (ii) 既設堤防の補強、河道内のゴミの除去、河床掘削等の緊急性を要する事項については原則に固執する事なく実施する。
- (iii) 土地取得は時間を要するため、必要な手続を可能な限り早期に実施する。

上記に基づき策定された代替案を図Ⅷ-2-3(ケース1)、Ⅷ-2-4(ケース2)及びⅧ-2-5(ケース3)に示す。

上記ケース1は一般的な実施計画であり、ケース2は特にその実施を早めた案となっている。またケース3は、逆に必要手続の遅れ等のためその実施が遅れる場合を考えている。

3. 実施計画の選定

図 VIII-2-1 から VIII-2-5 に示される実施計画の代替案、各プロジェクトの建設費及び便益に基づき経済分析を実施した。表 VIII-3-1 から VIII-3-4 は土石流・斜面崩壊対策に対する投資計画及びこれより発生する便益を示している。また表 VIII-3-5 から VIII-3-7 は洪水災害対策に対し策定されたものである。上表に示される建設費及び便益を基に各防災対策の実施計画に対し内部収益率を算定した。結果は以下の通りである。

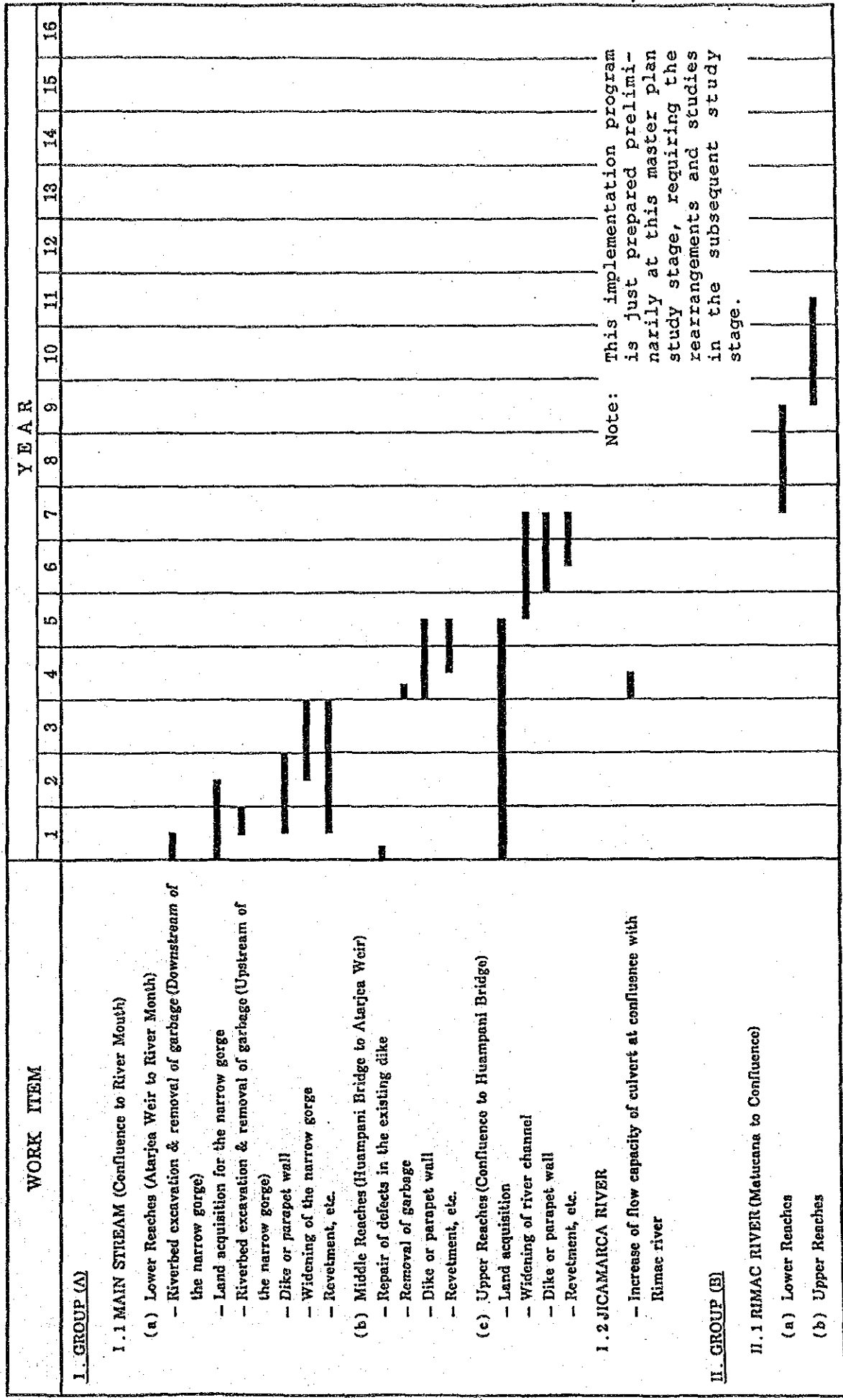
実施計画代替案	内部収益率(%)
土石流・斜面崩壊及び洪水災害対策	
ケース1	5.4
ケース2	5.2
洪水災害対策	
ケース1	14.9
ケース2	15.5
ケース3	10.5

上記経済評価結果は、土石流・斜面崩壊及び洪水災害対策の実施は各々ケース1及びケース2の実施計画に基づき行われた場合、即ち出来るだけ早期に実施する方が経済的に有利である事を示している。また民生の安定及び人命損失防止の点からも早期実施が望まれる。

上記の提案される実施計画を図 VIII-2-1 及び VIII-2-4 に示す。尚、示されている実施計画案については、マスタープラン・スタティの段階で予備的に作成されたものであるため、実際の実施に当たっては詳細な調査・検討及び財政条件などを勘案し再検討を要するものであることを注記する。

附 表

附 圖



Note: This implementation program is just prepared preliminarily at this master plan study stage, requiring the rearrangements and studies in the subsequent study stage.

図 Ⅳ-2-3 洪水災害対策実施計画(ケースI)

WORK ITEM	YEAR															
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
I. GROUP (A)																
1.1 MAIN STREAM (Confluence to River Mouth)																
(a) Lower Reaches (Atarjea Weir to River Mouth)																
-- Riverbed excavation & removal of garbage (Downstream of the narrow gorge)																
-- Land acquisition for the narrow gorge																
-- Riverbed excavation & removal of garbage (Upstream of the narrow gorge)																
-- Dike or parapet wall																
-- Widening of the narrow gorge																
-- Revetment, etc.																
(b) Middle Reaches (Huampani Bridge to Atarjea Weir)																
-- Repair of defects in the existing dike																
-- Removal of garbage																
-- Dike or parapet wall																
-- Revetment, etc.																
(c) Upper Reaches (Confluence to Huampani Bridge)																
-- Land acquisition																
-- Widening of river channel																
-- Dike or parapet wall																
-- Revetment, etc.																
1.2 JICAMARCA RIVER																
-- Increase of flow capacity of culvert at confluence with Rimac river																
II. GROUP (B)																
H.1 RIMAC RIVER (Matucana to Confluence)																
(a) Lower Reaches																
(b) Upper Reaches																

Note: As mentioned in note of Fig. VIII-2-3.

図 VIII-2-4 洪水災害対策実施計画(ケース2)

WORK ITEM	YEAR															
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
I. GROUP (A)																
I. 1 MAIN STREAM (Confluence to River Mouth)																
(a) Lower Reaches (Atarjea Weir to River Mouth)																
- Riverbed excavation & removal of garbage (Downstream of the narrow gorge)																
- Land acquisition for the narrow gorge																
- Riverbed excavation & removal of garbage (Upstream of the narrow gorge)																
- Dike or parapet wall																
- Widening of the narrow gorge																
- Revetment, etc.																
(b) Middle Reaches (Huanpani Bridge to Atarjea Weir)																
- Repair of defects in the existing dike																
- Removal of garbage																
- Dike or parapet wall																
- Revetment, etc.																
(c) Upper Reaches (Confluence to Huanpani Bridge)																
- Land acquisition																
- Widening of river channel																
- Dike or parapet wall																
- Revetment, etc.																
I. 2 JICAMARCA RIVER																
- Increase of flow capacity of culvert at confluence with Rimac river																
II. GROUP (B)																
II. 1 RIMAC RIVER (Matucana to Confluence)																
(a) Lower Reaches																
(b) Upper Reaches																

Note: As mentioned in note of Fig. VIII-2-3.

図 Ⅷ-2-5 洪水災害対策実施計画(ケース3)

第 IX 章 提 言

	目 次	頁
1.	概 要	IX-1
2.	提 言	IX-1

第 IX 章 提 言

1. 概 要

前章までの各章において、土石流・斜面崩壊災害及び洪水災害対策並びに非施設の方策の検討を通してRimac川流域防災対策マスタープランの策定を行ってきた。

本章においては、上記防災対策計画を実施に移す上で必要と思われる事項について提言を行っている。さらに防災対策計画の実施は可成り長期間を要すると考えられるが提案される防災対策計画は緊急性の高い事項を含むため、これら緊急性の高い事項に対する提言が行われている。

2. 提 言

- (A) 土石流、斜面崩壊及び洪水災害に対して策定された防災対策マスタープランを上位基本計画とし、この上位基本計画に基づき流域全体の一貫した総合防災対策計画の実施が特に重要であり、第一に提言されるべき事項として取り上げられる。
- (B) 一方、この総合防災対策計画の実現にはかなりの時間が必要であるが、緊急度が高く特に急務となっている事項があるため、以下の提言がなされている。
- (1) グループAに分類されている7溪流地区の土石流災害対策は危険度・緊急度が高くその実施が急務である。他方、提案されている対策はさらに詳細な地形・地質調査等を行いその技術的・経済的フィージビリティを確認する必要がある。従って、このフィージビリティ・スタディ実施に必要な手続を早期に着手する事が必要である。
- (2) 下流域の都市部においては、開発が進んでおり洪水災害に対する危険度・緊急度が極めて高いため、下流域について次の対策の実施が急務である。
- 河口より9~10.5kmに位置する上記狭窄部より下流の河床掘削及びゴミ・捨土の除去並びに護岸。
 - 上記狭窄部より上流の河床掘削及びゴミ・捨土の除去並びに護岸
 - 上記狭窄部の拡幅。
- また、狭窄部拡幅のために必要な土地取得を早急に実施する必要がある。
- (3) 中流域では、堤防の欠壊等河川構造物の破損が多く、多くの地点で見られる。これらの河川構造物に対する修復工事の緊急度も下流域に対する対策と同程度に高い事から、下流域の対策と同時着工とし緊急に実施する必要がある。

- (4) 上流域(合流点 - Huampani Bridge 間)の洪水災害防御対策は可なり大規模な土地取得を必要とする。この土地取得に時間が掛かると思われるので早急に土地取得に着手すべきである。
 - (5) 提案された非施設的方法はすべて早期に実施に移す事が望ましいが、その中でも特別緊急度の高い事項としては、(i)河川敷地内へのゴミ・捨土の禁止及び(ii)危険地への新たな不法侵入の禁止、の2項目でありその即時実施を勧告する。
 - (6) 上記(2)~(4)の実施に当たっては、実施に先立ってさらに詳細な調査、測量、設計作業などが必要となってくる。このため、これら作業のための資金調達など必要手続を進める必要がある。
- (C) さらに、防災の観点から重要度が高く且つ長期的視野に立って推進していく必要のある植生の研究に早期に着手する事を提言する。流域に植生を成功させるためには独自の条件に対して継続的な研究と資料の蓄積が必要であり、諸外国の研究成果等を参考にしつつ独自の研究を進めるべきである。
- (D) 流域にレーダー雨量計システムを設置する必要性と可能性を検討した結果、(i)降雨の予測を可能にするレーダー雨量計システムの設置の必要性は非常に高く、(ii)またその設置は技術的にも可能であり、災害防止の観点から著しく効果的である事が判明した。従って、流域にレーダー雨量計システムを設置するための検討を進める事を提言する。レーダー雨量計システムを設置するに当たり特に留意すべき事は、通信システム、警報システムあるいはその組織体制の確立等基本的事項の整備・拡充がシステムの機能を十分に発揮するために不可欠であり特に重要な事であるので注記する。
- (E) 防災対策施設的計画を実施していくにあたり不可欠である技術者の養成にも時間を要するため、その早期着手を提言する。また、このため早期に技術者訓練センター等の施設を設立することが望ましくそのための必要手続に着手すべきである。

補足説明

目次		頁
1.	植生に対する検討及び提言	A-1
1.1	植生の必要性	A-1
1.2	荒廃の原因	A-1
1.3	植生の必要条件	A-1
1.4	日本における荒廃地での植生の研究	A-1
1.5	提言	A-2
2.	Rimac川流域におけるレーダー雨量計設置の必要性 及び可能性に関する検討	A-3
2.1	設置の必要性	A-3
2.2	設置の可能性	A-3
2.2.1	レーダー雨量計の機能	A-3
2.2.2	設置の可能性	A-4

附図

図 積苗工

1. 植生に対する検討及び提言

1.1 植生の必要性

Rimac川流域内特に下流域は、植生もなく著しく荒廃が進んでいる。この荒廃により生産される莫大な量の土砂は種々の災害を引き起こす原因となっている。

例え防災対策として施設の方策が実施されたとしても、土砂の生産及びその移動は未解決な問題として残り、継続的に大災害発生の脅威にさらされる事となる。このため荒廃した流域を安定させるための植生が特に必要となっている。

1.2 荒廃の原因

Rimac川流域の荒廃の主な原因は、以下の通りと考えられる。

- (1) 流域はいわゆる半乾燥地に属している。特に、流域下流部は少降雨地域となっており、植物の繁殖を阻害している。
- (2) 地質は、主として花崗岩より成っており、その風化が著しい。この花崗岩は保水性及び養分に貧しく、植生の発生を難しくしている。
- (3) 山地の傾斜は急峻で、表面の土壌の移動が著しい。そのため植生が定着できない。

1.3 植生の必要条件

植生を発生させるための必要条件としては、以下の事項が考えられる。

- (1) 水の確保が可能である。
- (2) 表面の土壌が移動しない。
- (3) 成長育成に必要な栄養素を土壌が保有している。

植生を発生させる事が必要となる広大な地域に対し人工的に水を供給する事は、現在の流域内での上工水に対する水不足を考慮すると非現実的であると考えられる。このため可能な方法として、次の事項があげられる。

- (1) 土壌の保水能力を改善する。
- (2) 土壌の移動を防止する方策を設置する。
- (3) もし必要なら、施肥を実施する。
- (4) 乾燥気候及び貧栄養土に強い植物を植える。

1.4 日本における荒廃地での植生の研究

日本においてもRimac川流域と同様の荒廃地が存在する。これらの地域では多くの土砂が生産され、下流域に対し種々の災害を引き起こしている。

この様な状況から、日本においてはこれらの荒廃地に植生を回復させるため100年以上の長期間に亘り研究がなされてきた。

これらの研究成果を以下に紹介する。

- (1) 斜面全体を直接植物で覆った場合には、植生が定着する前に斜面を形成する土壌が移動するため、この試みは失敗に終わっている。
- (2) 従って、植生を繁殖させるためには、まず植物が育ちやすい基盤を作り、そこで安定した植生を作ってその植生の影響によって斜面全体を植生が入り易い状態にしていく事が有効である。
- (3) 上記の基盤作りでは、線的に土の動かない場所を作ってやる事が効果的である。
- (4) 花崗岩の風化土は保水性に欠け、また貧栄養土である。このため、保水性の改善及び土壌栄養素を豊かにするための研究が必要である。
- (5) 植生に対する種々の研究より、基盤を作り出す最善な方法の1つとして斜面の積苗工があげられる(添付図参照)。この方策は、保水性を高め、また土壌を安定させる上で有効である。
- (6) 乾燥及び貧栄養土壌に強い植物を選定する事が重要である。松、ユーカリ等は、次の理由からこの様な状況に強い植物である。即ち、松やユーカリは菌根類に属し、このため担子菌と呼ばれるキノコを作る菌が木の根元に付着する。このキノコ類の繁殖はやせた土から栄養素を吸収する能力を改善する。このため、この様な植物により植生をスタートする事が必要であり、それにより荒廃地の状況は徐々に改善され、他種の植物の成長及びその可能な範囲を増加させる。
- (7) 植物の自生は土中の栄養が木の幹や葉となり、さらに有機物に変わり、また土中の栄養素に戻るといふ様な自然の循環を必要とする事から植生を安定させるためには十分なフォローアップが必要である。この様な自然の循環系を確立するためには長時間を要し、植物がこの循環系を確立する前に土中の栄養を消費してしまう事により死に絶える事もある。このため、施肥、耕土等のフォローアップは、前述の循環系を確立するまで実施されなければならない。
- (8) 荒廃地に植生を回復するには100~200年のもしくはそれ以上の長時間を要するため、各地域において適切な方法を見出すため継続的な研究が必要である。

1.5 提言

Rimac川流域内の荒廃地に植生を成功させるために、次の提言が行われている。

- (1) 荒廃地における植生は、日本の他諸外国で取り組まれている国際的な問題である。前述の如く、種々の研究成果が得られているが、植生に支配的影響を与える気象、地質、土壌等異なるためRimac川流域内独自に検討を行い適切な方法を見い出さなければならない。従って、この研究を開始するよう提言する。
- (2) 植生を成功させるためには、継続的研究と資料の蓄積を必要とする。このため、長期間に亘り研究を実施する機関の設立が提案される。
- (3) 他の諸外国の例を参照すると共に、試験地域を設け研究と資料の蓄積を行う事が提案される。また、既に流域内で自生している樹木及び草類の種類等も参考にすべきである。
- (4) 流域内の極端に乾燥した状況に対処するためには、土壌の保水性の改善に特別注意を払わなければならない。土壌の保水性の改善に関しては、超吸収樹脂等の保水剤

の使用等も考えられるが、その効果等現在研究中である。これら特殊なアイデアの適用を試みる事も重要である。

2. Rimac川流域におけるレーダー雨量計設置の必要性及び可能性に関する検討

2.1 設置の必要性

流域内の豪雨特性及びこれにより発生する災害特性は以下の通りである。

- (1) 流域内に豪雨を持たらす雲は、Rimac川に隣接するAmazon河流域で発生する。
- (2) この雲は時折Andes山脈を越えてRimac川流域に広がる。
- (3) この雲は数分のうちに広がり、Rimac川上流域で豪雨を発生させる。
- (4) Rimac川流域は急峻かつ植生に乏しい事から、降雨は急速に流下し、山腹斜面での貯留効果は発揮されない。土石流はこの流れにより未固結堆積物が浸食を受けるため発生する。また土石流の発生は、上記の豪雨を持たらす雲の発生から30分後であると云われている。
- (5) Rimac川は急勾配河川として特徴づけられる。このため、洪水は数時間のうちに下流域に達し、有効な対策を実施する事を難しくしている。

この様な状況から、Amazon河流域での雲の発生とその移動を事前に予測できるならば、必要な対策を実施するため非常に有効であると考えられる。

上記より、災害を事前に予測し、被害を最小限にとどめるために必要な対策を実施する事を可能にするレーダー雨量計設置の必要性は高いものと言える。

2.2 設置の可能性

2.2.1 レーダー雨量計の機能

レーダー雨量計の機能の概要は次の通りである。

- (1) レーダーから発せられる電波が降雨にぶつかり、反射する事により降雨の予知がなされる。レーダー雨量計の適用範囲は1基で半径約200kmである。定量的な観測はレーダー設置地点から、半径約120kmである。
- (2) 地上雨量計は、地点雨量計として設置されるため降雨発生 of 広さを精度良く示す事はできない。しかし、レーダー雨量計は簡単に降雨の範囲を知る事が可能である。
- (3) レーダー雨量計は、降雨面積の変化及び移動、その方向、速度、強度等を追跡する事が可能であるため、2~3時間のうちの降雨の状況を予測する事が可能である。
- (4) レーダー設置地点で得られた降雨情報は、多重回線で気象観測所へ送られる。この回線は、レーダービデオ及び他の降雨資料の電送を可能にする。

2.2.2 設置の可能性

Rimac川流域に対するレーダー雨量計設置の可能性について検討した結果、レーダー雨量計の設置は可能であり、次の点で災害を避けるために効果的であるという事が判明した。

- (1) レーダー設置地点としては、最上流部標高4,800m地点に位置するTiclioもしくはMillocがあげられる。TiclioもしくはMillocへのアクセスも国道20号線が通過しているため容易である。
- (2) レーダー雨量計の適用範囲及び定量観測の可能な範囲は、各々半径約200km、120kmである。Rimac川流域は流域面積3,300km²、河道長150km、流域幅20kmであるため、1基のレーダーで流域全体を観測することが可能である。さらに前述の位置にレーダーを設置する事で、Amazon河流域に発生する雨雲についてもほぼ観測可能となると考えられるため、雲及び降雨の発生、移動を予知し、降雨面積、強度等の予測が可能である。
- (3) 入手された情報は、時々刻々流域内の気象観測所へ送る事が可能である。また情報もしくは必要な警報をこの気象観測所から通信回線を設置する事により流域内の各地区へ転送する事も可能である。
- (4) 2~3時間後の降雨の状況が予測できるため、土石流及び洪水の発生を予測し、2~3時間前に警報を発する事が可能となる。
- (5) 1セットのレーダー雨量計の設置により、流域全体に対する観測システムが可能となる。従って、レーダー雨量計の建設費はレーダー雨量計、データ解析システム及びその他の関連施設を含め約10百万US\$と推定される。この建設費はその予算処置が極めて難しいという様な額ではないと考えられる。

附 圖

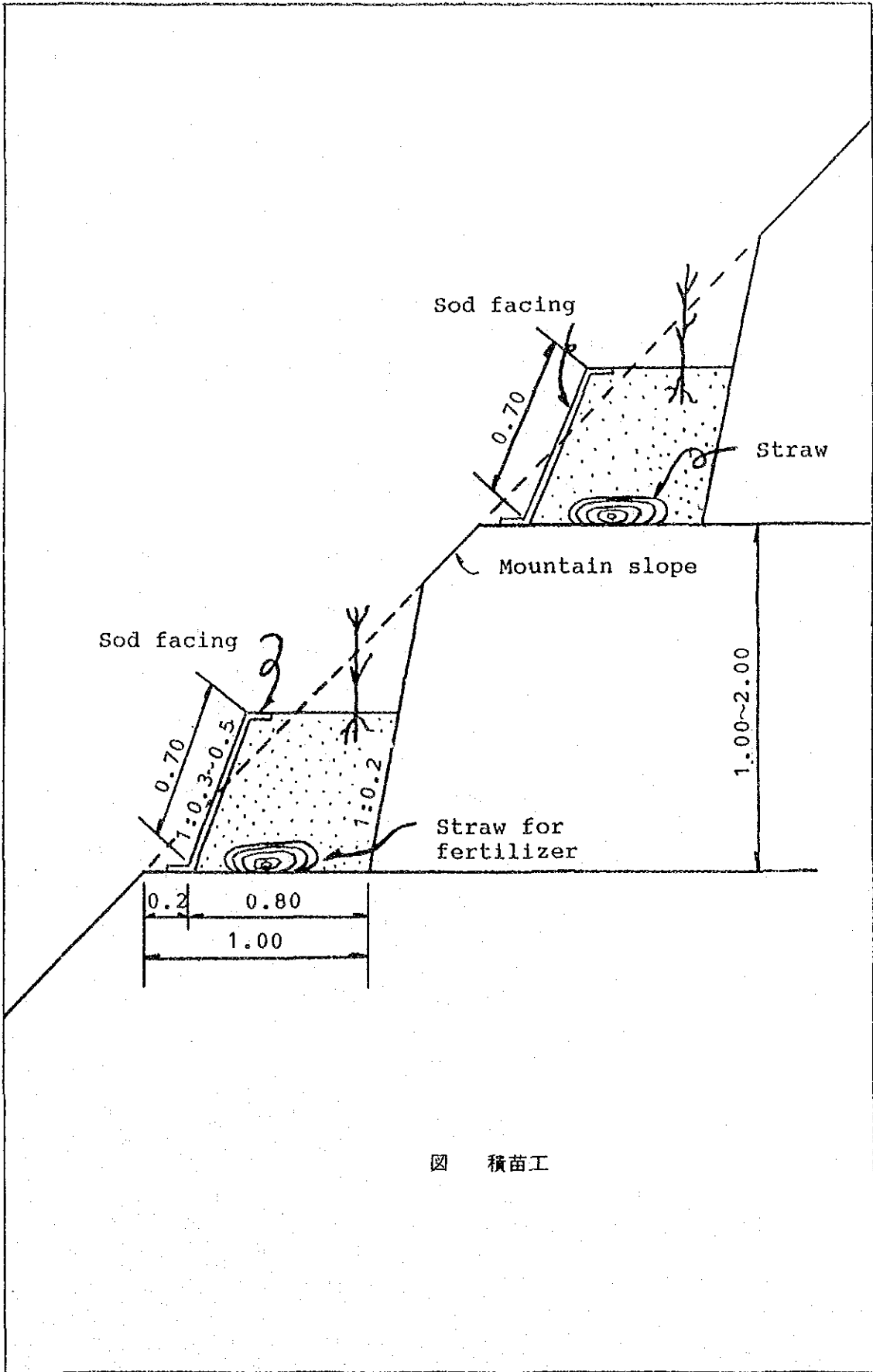


図 積苗工

